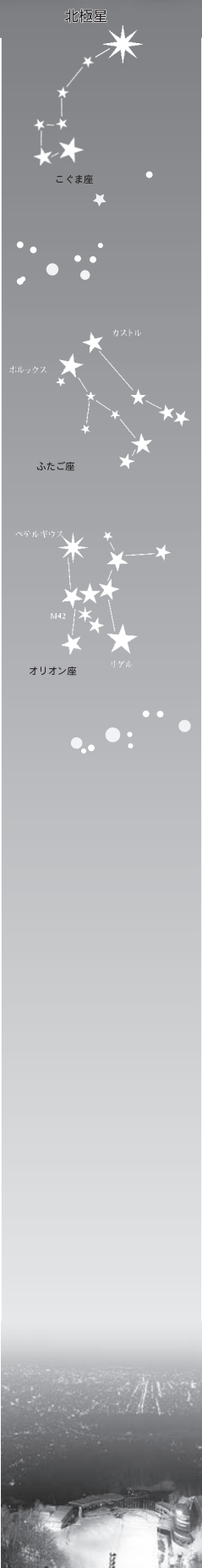
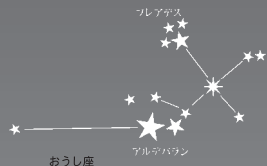


ポラリスを仰ぐ北の大地から



フィクションがノンフィクションを 超えるとき

旭川医科大学医師会 会長 古川 博之

2017年8月に作家谷村志穂さんが「移植医たち」を上梓した。

谷村さんは札幌出身で、多数の小説を書いているが、ほとんどが恋愛小説で、今回のように医療小説、とくに移植を扱ったのは異例である。谷村さんとお会いしたきっかけはテレビの対談番組で、ちょうど、旭川医大で最初の生体肝移植を行った後でもありその話で盛り上がった。谷村さんにとっては、移植が北海道で行われていること自体が珍しく驚きを禁じえないようだった。彼女の移植に関する記憶は、小学生の時に行われた和田移植で途切れていたのだ。

彼女をさらに移植の世界に引き込んだのは、2014年に日本移植学会50周年記念のテレビ番組を制作することになり、今は亡き「移植の父」スターズル教授のインタビュー役に抜擢されたことだった。当時スターズル教授はまだお元気で、アメリカ・ピッツバーグのオフィスで谷村さんから質問にこやかに答えていた。2014年12月に谷村さんから移植の小説を書くので医療監修を引き受けてほしいという依頼があり、これまでの経緯から快くお引き受けした。当時のタイトルは「アンクランプ」（血流再開を示す）で小説新潮に連載され、これに加筆したのが「移植医たち」だ。

あとがきで、谷村さんが「ストーリーはすべてフィクションであるが…」と念押しをされているが、多くの内容はピッツバーグや北海道で実際にあったことに基づいている。小説の中には、実際に起きたノンフィクションを背景にフィクションが散りばめられており、フィクションからくる感動が返って現実味を高め、この作品の完成度を高くしているように思えてならない。そしてそのことが、ノンフィクションでは表現し得ない移植医の情熱をうまく引き出してくれている。谷村さん自身が「究極の恋愛小説」と言われているように、移植への思いが伝わる小説が完成した。

サイボウズLive終了

石狩医師会 会長 立石 圭太

今年4月15日、サイボウズLiveが終了する。サイボウズLiveは、熊本地震のJMATでも利用されていた無料のグループウェアであるが、こちらでも医師会員数名と多職種のグループで有効に活用していた。

サイボウズLiveを始めたのは、7年前の平成24年5月。多職種の会では、月に1度のカンファレンスはあるが、全く別の組織に属する医師、看護師、薬剤師、ケアマネ等にとっては、相手を拘束する電話と違い、ちょっとした隙間時間に確認や連絡ができ、大変使い勝手の良い情報伝達手段であった。

利用から2～3年後、地域包括ケアのためのICTを売るベンダーが数多く訪れるようになった。しまいには、医療連携を主導したい行政が、ベンダーを連れてくるということもあった。

終末期の患者をこのメンバーで何人も連携したが、各自状況を報告共有し、全員が共通の方向を向いて、穏やかな看取りのための準備を進めてくれる。書き込みを読み返しても、まるで同じ組織に属しているかのように、簡潔に状況をまとめて報告し、他の職種にうまく依頼を行い、各自がまた次の行動へと移っている。脱落する職種は1人もいない。実は、多職種連携の鍵は、優れたICTではなく、自分の持つ情報をきちんと選り分け、相手の必要な情報をきちんと伝えていることだと思う。診療録や訪問看護報告書では、自分にとって必要な情報でも他の職種にとっては必要としない事柄も多く含まれる。必要な情報がないことも困るが、逆に、必要としない情報が溢れても、不要に相手を拘束することにつながり、連携者間に連携のストレスを生むのではないかと感じる。

今回、サイボウズLiveが終了するが、情報をきちんと伝える手段であれば、代替手段がないこともない。連携に必要なのは、自分の報告書を完璧に仕上げるのではなく、他の職種が必要としている情報を理解し、それをきちんと伝える力だと感じる。たぶん、サイボウズLiveより優れたグループウェアがあっても他の職種と連携できる力がなければ、何の役にも立たないと思う。あと数日と迫ったサイボウズLiveの終了は、今後の多職種連携についての不安ではなく、多職種の仲間の7年間の成長を感じるものでもあった。